

浄土真宗僧侶 名倉 幹

いつ死ぬかも知れぬと心得て、しかも百年の計を為せ。大震災からの教訓

まず、この度の3月11日に東北地方で起きました大地震、大津波によりましてお亡くなりになられた多くの方々、そのご家族、ご親戚、ご友人に対し、深く哀悼の意を捧げます。また、家族を失い、家を失い、仕事を失い、何もかも一挙に普段の日常生活を失い、心身の苦しみと失望のどん底にさいなまれて多くの皆さんに、心からお見舞い申し上げます。

私ども残されたものは、この悲劇からしっかりと本当に人生の実相を学び取って、今後どんなことが起きても、生きて死んでいける道、生にも死にも悩まされざる一念の信を、しっかりと生きていく最中に自分のものにしておかななくてはならないと、改めて痛感しています。この度の多くの方々の無念なる思いと犠牲が、決して無駄になってしまわないように、私ども今生きているものは、健全なる思想を学び取って、真の安心、救いというものをしっかりと普段から自分のものにすべきであります。

我々はすでに、『この世は諸行無常であり、人生は苦なり、生あるものは必ず死に帰し、盛んなる者は必ず衰える習いあり。』と昔から人生の実相、真理を教えてもらっているのであります。また、『人生には上り坂、下り坂、そして「まさか」という坂がある。』と示されているのであります。普段の我々の予想を超えた想定外の「まさか」ということは、無始以来の因と縁が熟せば起こりうるぞと、私は油断ばかりの我々にいつも警鐘を鳴らしているのであります。

禅寺によく、次の句が掲げられています。

『生死事大 無常迅速 各宜醒覺 慎勿放逸』

我々の生き死にの一大事は、正に無常迅速なり。各々よく真理に目覚めて、慎んで油断せず、放逸な生活を送ることなかれ、と言う意味です。

親鸞聖人は鎌倉時代に、

『明日ありと 思う心の あだ桜 夜半(よわ)に嵐の 吹かぬものかは』

と、歌われたそうです。明日があるさ、明日があるさと思っている心は危ういよ。今夜に嵐が来て、桜がみな散ってしまうかもしれないよ。つまり、本当に明日わが命が残っているかは分からんものなのだと、人の命のはかなさをしみじみと歌われ、いつ死が来ても、死ぬるようになっておけよと、差し迫った気持ちが伝わってきます。

真に人生は無常であり、すべての現象に偶然はなく、ありとあらゆる無数の因と縁が絶え間なく、今の現象になっておるのであります。わが命、勿論然り。

今から約2百年前、新潟に住んでおられた禅僧、良寛上人は三条大地震に遭

遇されました。難を免れましたが、その時友に次のような手紙を書かれました。

『災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。

是はこれ災難をのがるる妙法にて候。』

良寛さんはさらっと言うておられますが、どんなことでも身に遭遇した出来事に、ただ随順していけるようになられた良寛さんは、相当仏道修行に打ち込んでおられたのであります。逆らえないものには逆らえない、ただ受けていくばかりである、という心一つの持ち主になることが一大事であります。そこには、何ものにも壊されない金剛のような安心感が育っています。

この世に生まれ出てきた以上、無常は免れない。しからば、どのような激しい嵐が来ようとも、逆境が来ようとも、今の境遇は崩れるかもしれないが、境遇が落ちても、病気になっても、家族を失っても、また死なざるを得るときも、心の奥底に、そうしていける、随順していくことのできる、一つの大安心といえますか、道理に一切お任せした心力を早くしっかりと養っておかなくては、いざ「まさか」に遭遇したときには、ただうろたえ、人生をはかなみ世を恨み、劇苦、失望のどん底に陥る可能性が大きいのであります。そうなってほしくないために、約2500年前から、仏の道が説かれてきたのであります。

『いつ死ぬかも知れぬと心得て、しかも百年の計を為せ。』と言われていました。人生は無常、どうせいつか死ぬんだから、享乐的に刹那的に生きていきましょうでは、虚しいあり方でありまして、本当にいつ死ぬかもしれんなー、いつ死が来ても死ぬるようにしとかなあかんなーとしっかりと土台の安心を確立した上で、しかも人事を尽くして自他のためにより良い社会を建設していこうと一歩一歩進んでいくのが、本当にしっかりと健全な人生観であると思います。

普段から仏の教えを真剣に聞いていくということは、わが心の栄養補給を常に怠りなくやることであり、それによって、普段の何気ないことが深く喜べるようになり、また、まさかのことに遭遇しても、それに随順して行けるようになることです。これが、真の自由人であり、真の幸福者であると思います。心力の所有者と申してもよろしいかと存じます。

たとえ、火の中、水の中から救い出されても、それらを直ちに仏の救いとはいわないのです。反対に、火の中に死すとも、水の中に溺れるとも、その人の心が死に畏れず悩まざる一念の心を得るに至るのを救いというのであります。生老病死に悩まされざる生を得ることを救いというのであります。外物、外事に悩まされざる光と力とを得たことを救いというのであります。

今生きている一人ひとりが、このこと一つを油断なく、普段の日常生活において心がけていくことこそ、この度の多くの犠牲者が真に報われていく大事な道であると信じています。ともに仏道を大切に学び取っていきましょう。合掌（ご質問・ご意見・ご感想をどうぞ下さいませ。mikinakura@nifty.com まで。）